

II-67

都市河川環境に対する住民の評価構造

九州大学大学院○学生員 山下 三平
九州大学大学院 学生員 元永 秀
九州大学工学部 正 員 坂本 紘二
九州大学工学部 正 員 平野 宗夫

1. はじめに

河川環境に対して住民の抱くイメージは、彼らにとって外部空間である環境のもつ視覚的要素によって規定されるだけでなく、彼らにとっては＜内的要因＞である属性や経験によっても影響されるものと考えられる。本稿では都市河川を対象として、この＜内的要因＞に属する住民の水辺体験と、同じくそれに含まれる彼らの水辺に対する接し方に現れる社会性、の二つの事項に着目し、それらと河川環境イメージとの関係を把握することによって住民の都市河川環境に対する評価構造を明らかにする。

2. 都市河川環境に対する評価構造

河川環境イメージの調査は、福岡市の都市域を流れる 2級河川室見川下流域と、同じく福岡市の中心市街地天神・中州を流下する那珂川流域の、それぞれの住民を対象としたアンケート（実施年月日：室見川 1988/2/13-14；那珂川 1989/10/20-23, 11/10-13）により行なった。那珂川に関しては市の中心部に位置する下流域だけでなく中・上流域についても調査を行なっているが、今回の分析には室見川との比較のため、これに対応する下流域のデータのみを用いている（有効回答：室見川下流域 272部；那珂川下流域 208部）。

水辺の雰囲気全体を体系的に表す適当な表現によって構成されたイメージ項目と、住民の過去の水辺体験を表すための＜水害体験（の有・無）＞、および水辺に対する接し方に現れる社会性を示す＜水辺の清掃活動（への参加・不参加）＞、との関連性を把握するために、それらを変数としてクラスター分析（ワード法）を行なっている。この分析ではまた、住民の水辺に接する割合を示す＜水辺の利用頻度（の高・低）＞も変数として用いている。なお、＜水辺の清掃活動＞と＜水辺の利用頻度＞については、最近の室見川および那珂川に関するものだけでなく、過去、それぞれの住民の身近にあった水辺（那珂川流域住民は小学生の頃身近にあった水辺に限定）に関する同様の項目をも変数として用いている。

＜水害体験・有＞と＜水害体験・無＞、＜水辺の清掃活動・参加＞と＜水辺の清掃活動・不参加＞、および＜水辺の利用頻度・高＞と＜水辺の利用頻度・低＞の対が、それぞれ別のクラスターに属するようにすることと、各クラスターの独立性を明確にすることを指針としてイメージの分類を行なった結果、河川環境イメージは図-1（室見川の場合¹⁾）および図-2（那珂川の場合）のようにそれぞれ 3つのクラスターに分類された。

これらの図に示されているように、両河川下流域住民の河川環境に対する評価構造は共通性がきわめて高い。その共通性を整理して示すと次のようになる。

(1) ＜水害体験・有＞、＜水辺の清掃活動（過去および現在）・参加＞、および＜水辺の利用頻度（現在）・高＞と関連の強いイメージ項目は＜ドブ＞、＜水が汚い＞、＜排水路＞であり、このような体験や社会性をもつ場合、住民は河川環境に対して＜現状否定的な見方＞をもつ傾向がある。

(2) イメージ項目＜水害＞および＜大雨の時不安＞を含むクラスターは＜水害に対する危機感＞を表すものと考えられるが、実際の水害体験の有無とは関連が弱い。

(3) ＜水害体験・無＞、＜水辺の清掃活動（過去および現在）・不参加＞、＜水辺の利用頻度（現在）・低

A1	<水害体験・有>
A2	<水辺の清掃活動（現在）・参加>
A3	<水辺の清掃活動（過去）・参加>
A4	<水辺の利用頻度（現在）・高>
イメージ：<ドブ川>	
〃	<水が汚い>
〃	<排水路>

イメージ：<水害>	
〃	<大雨のとき不安>

B1	<水害体験・無>
B2	<水辺の清掃活動（現在）・不参加>
B3	<水辺の清掃活動（過去）・不参加>
B4	<水辺の利用頻度（現在）・低>
B5	<水辺の利用頻度（過去）・低>
A5	<水辺の利用頻度（過去）・高>……（*）
イメージ：<せせらぎ>	
〃	<水がきれい>
〃	<自然が豊かなところ>
〃	<見晴らしのよいところ>
〃	<四季の変化に富む>
〃	<いこいの場>
〃	<子供の遊び場>
〃	<散歩道>
〃	<歴史のある川>
〃	<大雨のときも安心>
〃	<運動場>……（*）

A1	<水害体験・有>
A2	<水辺の清掃活動（現在）・参加>
A3	<水辺の清掃活動（過去）・参加>
A4	<水辺の利用頻度（現在）・高>
A5	<水辺の利用頻度（過去）・高>……（*）
イメージ：<ドブ川>	
〃	<水が汚い>
〃	<排水路>

イメージ：<水害>	
〃	<大雨のとき不安>
〃	<運動場>……（*）

B1	<水害体験・無>
B2	<水辺の清掃活動（現在）・不参加>
B3	<水辺の清掃活動（過去）・不参加>
B4	<水辺の利用頻度（現在）・低>
B5	<水辺の利用頻度（過去）・低>
イメージ：<せせらぎ>	
〃	<水がきれい>
〃	<自然が豊かなところ>
〃	<見晴らしのよいところ>
〃	<四季の変化に富む>
〃	<いこいの場>
〃	<子供の遊び場>
〃	<散歩道>
〃	<歴史のある川>
〃	<大雨のときも安心>

図-1 河川環境の評価構造（室見川）

図-2 河川環境の評価構造（那珂川）

注）（*）は類似クラスターにおいて共通しない項目

>と関連の強いイメージ項目は、<せせらぎ>、<水がきれい>、<自然が豊かなところ>、<見晴らしがよいところ>、<四季折々の変化に富む>、<いこいの場>、<子供の遊び場>、<散歩道>、<歴史のある川>、<大雨の時安心>であり、このような体験や社会性をもたない場合は、総じて河川環境に対して<現状肯定的な見方>をもつ傾向がある。

3. おわりに

室見川および那珂川下流域住民を対象とした調査・分析により、都市部の河川環境に対する住民の評価構造は共通性が高く、体験や社会性の違いによって<現状肯定的な見方>と<現状否定的な見方>が明確に分かれることが明らかになった。那珂川に関しては中・上流域の、比較的的自然環境に恵まれた地域のデータを基に同様の分析を行なっているが、イメージに明確なまとまりがみられず、下流域すなわち都心部とは大きく異なる評価構造がそれらの地域には存在するものと考えられる。これについては河川周辺の物理的形態を考慮した上で、住民の水辺体験や社会的諸属性をさらに違った角度から捉え直すことによって、今後検討していく予定にしている。

【参考文献】

- 1) 山下・元永・坂本・平野・天本：河川環境イメージの形成過程と河川利用行動特性，第33回水理講演会論文集，PP.631-636，1989。